

— 連載 —

美術館のある風景 (第19回)

これまでの展覧会を振り返る

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二



丸の内の街角の三菱一号館美術館

4月6日、三菱一号館（以下、「当館」）は開館6年目を迎えました。この機会に、これまでの5年間の展覧会を振り返ってみます。現在、17本目の「ワシントン・ナショナル・ギャラリー展～アメリカ合衆国が誇る印象派コレクションから」を開催していますが、来館者は5年間で170万人を超え、年間で約35万人の方々にご来場いただきました。

旧三菱一号館が竣工（1894年）した頃は日本の近代化の時代であったことを踏まえて、当館の展覧会は欧米の市民社会の成立期に焦点を当て、19世紀後半から20世紀初頭の近代絵画や版画作品を中心に取り上げてきました。画家たちの視線が日常の生活や都市化の風景へと向かい、風俗画、静物画、風景画へと作品の幅も広がりを見せた時代です。従って、印象派やポスト印象派の画家を取り上げる機会が多くなりました。マネ、モネ、ルノワール、そして当館の所蔵するロートレックらの作品です。また、同時代の英国のバーン＝ジョーンズを始めとする唯美主義の画家、世紀末の象徴主義の画家ルドン、20世紀の絵画の変革期に活動したカンディンスキーと青騎士グループ、そしてヴァロトンなどを取り上げました。更に、18世紀に遡り、印象派に影響を与えた風俗画・静物画の巨匠シャルダン、女性画家の先駆的存在であるヴィジェ・ルブランの本格的な展覧会も行えました。そして、今回は、農民や自然への眼差しを

向けたジャン＝フランソワ・ミレー展となりました。こうした展覧会では、ジャポニズム等の東西交流の視点を加えることにも注力し、時には、型紙やジャポニズムの器といった生活美術に係わる企画も実現できました。また、当館の所蔵作品や三菱ゆかりの作品による展覧会も記憶に残るところです。どの展覧会でも、当館の特徴である連続する小部屋の展示空間を意識した演出に心がけました。

今後はこうしたスタンスを基軸に据えつつも、時代や作品の幅を広げる試みにチャレンジを続けて、来館者の期待に応えたいと考えています。今秋開催の「プラド美術館展—スペイン宮廷 美への情熱」や来春開催の「PARIS オートクチュール—世界に一つだけの服」展はこうした取り組みとなります。これまでに収集に努めた所蔵品は、ロートレックのグラフィック作250点を中核に、ルドン、ボナール、ヴァロトンらの版画作品群、ルドンの最大のパステル画《グラン・ブーケ（大きな花束）》等の絵画、そして寄託作品群と充実してきました。これらを紹介する機会も大切と考えています。何よりも、これまで培ってきた国内外の数多くの美術館等との信頼関係と来館者の支持が当館の活動の大きな力と認識しています。今後も、良質な展覧会の開催や美術の普及活動を通して、丸の内の街づくりと人々の生活に寄与する努力を重ねて行きたいと思っております。